



平原康多は中学生まで新潟にいたのだから 強引に地元選手の枠に入れて紹介しちゃいます

「平原康多は弥彦競輪で最終日まで走れない」。そんな魔法がかけられたのは2011年の寛仁親王牌。2日目の二次予選で車体故障して7着。3日目から欠場したが、その後、GI2回、GⅢ、FIを1回ずつ走って、失格か落車で途中欠場している。直前の練習でケガをしての欠場もあった。

平原は新潟の選手だった父（平原康広）と一緒に、新潟県で中学まで過ごしている。現在39歳なので、39分の15は地元選手。当時、参加すると、前検日に「最終日まで走りたい」と言っていました。

ようやく呪縛がとけたのが2018年の記念。決勝には乗れなかったものの3勝を挙げている。そして昨年の記念でやっと優勝。弥彦での優勝は2003年のA級戦以来2回目でした。

さて、最近の成績を物足りないと感じている人は多いはず。スリーランクくらい上がったスピード競輪への対応に苦慮しています。

す。彼は実は不器用な選手。大ギアブームのときの対応に時間がかかったことをみても明らか。でも9月の松阪記念でこんなことを話していました。「脇本雄太君は競輪界を震えあがらせる、衝撃の走りを見せている。でもそこに挑戦していかないと。追いつき、追い越せ、その気持ちがなくなるときは辞めるとき」。

ちなみに昨年の記念で優勝したあとのこと。共同インタビューの模様を撮影して、「このインタビューを公式弥彦競輪チャンネルに挙げてもいいですか」と尋ねたら、返ってきたのは「ありがたいのですが、ぜひお願いします。心を奮い立たせて、応援したくなるの当たり前前ですよ」。

▽弥彦競輪 寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント

地元選手プラス1 第3話

【新潟スポーツ 信氏 忠】

